

『努力することの大切さ』

滋賀県

五個荘洗心館

中学1年生

田 邊 紀美子

「ボロボロボロ」なみだがこぼれおちる。「何で勝てないのだ。」私は、ずっと思っていた。でも思っているだけで何も行動に出すことは出来ていなかったのかもしれない。

私は、四年生のころから試合に出してもらえるようになった。でも試合に出ても一回戦負け。そして、負けて泣く。それが、五年生になるころまでは当たり前だった。他のみんなは、勝っているのに、私だけ勝てない。くやしいと思っていたが、どこか頭の片すみで、私は、みんなよりやりはじめたのがおそかったからしょうがないと思っていたのだと思う。

私は、四年生の終わりごろ試合に出た。しかし、一回戦負け。私が試合に負けたあと、いつもそばで支えてくれている祖母の顔をふと見ると、祖母は、残念そうな顔で違う人の試合を見ていた。私が三年生のときに亡くなった父の仕事を引きついで母に代わって、剣道は、祖母に付き添ってもらっていた。私は、祖母のそんな顔を見て思った。「こんな悲しそうな顔、絶対おばあちゃんにさせたくない。」その日から私は、どうしたら強くなれるのか、試合に勝てるのかを考えた。私は、練習しかない、そう思った。

「努力は報われる。」この名言を知っていますか。「努力して報われないことがあるだろうか。たとえ、結果に結びつかなくても、努力したことが必ず生きてくる。」これは、世界のホームラン王といわれた元ソフトバンク監督の王貞治さんの言葉だ。私はこの名言どおりだと思っている。努力していない人が強くなるわけがない。勝てるわけがない。努力している人は絶対にいつか報われるはず、その言葉信じて私はがんばろうと思った。

私は先生に家でどんな練習をするべきなのか教えてもらったり、祖父に練習台を作ってもらったりとけい古のない日などには、何本も何本も竹刀をふった。出げい古に行っているところの先生からは、「走ると足が前になるようになって遠くにとべるようになるよ。」と言われ走るようにもなった。出げい古に行く回数もふやし、けい古でも声をだして先生に注意されたことを頭において意識しながら一生けん命はげんだ。つらい時もあった。やめたいと思うことも剣道がきらいになってしまうことだってあった。けれど、それでも祖母のあの顔は頭から消えることはなかった。思い出すたびに絶対あきらめたくない、そう思えた。

私はある先生にかかりにいったとき教えてもらった。「お前がえらいときは相手もえらい。だからそこがチャンスなのだ。」と。六年生になると試合の量もすごく増えた。私は試合の前必ず思うことがある。祖母のあの顔、先生に言われた言葉、そして、絶対に勝ってやると。

六年生の試合では負ける回数が減り、勝つ回数が増えた。勝つたびにあの悲しい顔の祖母でなくうれしい顔の祖母を見ることができた。そしてそのことがきっかけで自分自身の心も強くなれたと思う。でもこれで終わりにしたくない。だから私は、いつもそばで応援し負けたときは一緒に泣いてくれる、勝ったときは一緒に喜んでくれる祖母に感謝して祖母のためにも自分のためにもがんばりたい。そう思う。

中学生の試合はレベルもあがり、そんなにあまいものではないと思うが、そんな中でも、中学生、この三年間もっと試合に勝てるようにもっと練習にはげみ、日々努力していこうと思う。